The Waymaker

Michiko Toyama across Three Worlds

日本語訳

プロローグ

斎藤 槙

何年経っても、人々はあのパリの朝のことを語り続けた。

1937年6月21日。コメディ・デ・シャンゼリゼの客席は、プログラムに記された午前10時30分の開演時刻を迎えるずっと前から埋まっていた。淡い色の壁、すっきりとしたアール・デコの線、天井から降り注ぐ柔らかな光。その下に並ぶ赤いビロードの座席には、作曲家、批評家、学生、そして好奇心に駆られたパリの人々が座っていた。

この朝の演奏会は、国際現代音楽協会（ISCM）の第15回音楽祭の一環だった。プログラムは国際審査員によって選ばれ、そこに名を連ねることは容易ではなかった。すでに名声を確立した作曲家たちと、まだ誰にも知られていない作曲家たちの作品が並び、聴衆は心地よさよりも、むしろ何かに揺さぶられることを期待して会場に足を運んでいた。

演奏会は、ヨーロッパを代表する作曲家の一人、アルテュール・オネゲルの作品で幕を開けた。その拍手が静まると、人々の関心は次の作品へと移った。日本から来た24歳の若い作曲家による新作だった。

華奢な姿で、落ち着いた身のこなしの彼女は指揮台へ進み、軽く一礼して演奏者たちに目を向けた。

客席の何人かは、もう一度手元のプログラムに目を落とし、それから再び指揮台を見つめた。国際的な音楽祭で女性が指揮をする姿を見たことのある人はほとんどいなかった。ましてや、それが若い日本人女性となればなおさらだった。

彼女の名は、外山道子。

これから彼女が指揮しようとしていた作品《やまとの声》は、日本最古の歌集である『万葉集』と『古今和歌集』から、千年以上も昔に詠まれた和歌をテキストに用

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

いていた。そこに歌われていたのは、春の鳥、糸に通した真珠、荒々しい岩に隔てられた島々、遠く離れることへの思い、そして何かが過ぎ去ったあとに残るものだった。道子は、それら古代の言葉を1937年という時代の音楽言語へと形づくっていた。

しばらくの間、道子は静かに立っていた。

そして振り返り、指揮棒を上げた。

会場が静まり返った。

《やまとの声》の最初の音が響き始めた。

曲は静かに始まった。弦楽器が低くささやくように響き、その上を木管楽器が繊細な弧を描いて上昇していく。やがてソプラノが入る。初めは静かに、ほとんど抑制されたように。そして旋律は次第に高まり、ついにはホールを切り裂くような一声となってほとばしった。

その音楽の中では、古いものと新しいものが、その継ぎ目を意識させることなく共存していた。彼女は、日本の伝統音楽をパリに持ち込み、ただ鑑賞してもらおうとしたのではなかった。それを現代の和声とぶつけ、その先に何が生まれるのかを確かめようとしていたのだ。

最後の和音が消えていくと、ホールはしばらく静寂に包まれた。

そして突然、拍手が沸き起こり、会場いっぱいに広がった。「ブラボー！」という声が響き、聴衆は立ち上がった。道子は一度お辞儀をし、演奏者たちに敬意を示すと、舞台を後にした。

その表情からは何も読み取れなかった。

しかし、彼女の手は震えていた。

＊ ＊ ＊

その日の残りの時間は、祝福の言葉の中で過ぎていった。廊下で交わされる握手。返事をしなければならないメッセージ。そして、ほかの都市での演奏日程についての話。

その日は夏至だった。まるで光そのものが去ることを拒んでいるかのように、いつまでも明るかった。空がようやく薄暗くなって初めて、エコール・ノルマル音楽院の仲間たちは道子を自分たちだけのものにすることができた。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

仲間たちは、どうしても祝おうと言った。

それなら、パリ万国博覧会以上にふさわしい場所があるだろうか。

その春に開幕した「現代生活における芸術と技術の国際博覧会」は、パリの街を一変させていた。セーヌ川の両岸にはパビリオンが立ち並び、人混みの間を音楽が流れていた。この博覧会は、科学と発明こそが世界を新しく、より良い時代へと導いていくのだという未来像を示すためにつくられていた。

その夜、道子たちはトロカデロへ向かう人々の流れに加わった。空気はまだ暖かかった。カフェは人々の声でにぎわい、恋人たちはセーヌ河畔を歩いていた。ストラヴィンスキーは数本先の通りで作曲をし、ピカソはアトリエで制作を続け、亡命してきた作家たちは夜遅くまでワインを飲みながら政治を論じていた。

自らの初演を終えたばかりのその夜、そんなパリを歩いていると、この街はいつまでもこのまま続いていくように道子には思えた。

博覧会は光と音楽にきらめいていた。その一方で、飲みかけのワイングラスの傍らには、新聞が開かれたまま置かれていた。

ヒトラーはラインラントを再軍備化していた。ムッソリーニはエチオピアを蹂躙していた。スペインではフランコが進撃していた。街を行き交う難民たちは、観光客が見に来たヨーロッパとはまるで別のヨーロッパの物語を背負っていた。

そして広場に着く前に、道子は、その後も長く記憶に残る光景を目にした。

二つのパビリオンが、互いに向かい合って立っていた。

一方には、アルベルト・シュペーアが設計したドイツ館がそびえていた。高く、厳めしく、その頂には鷲と鉤十字が掲げられていた。

その向かいにはソビエト連邦館が立ち、屋上にはヴェラ・ムーヒナによる、労働者と集団農場の女性が鎌と槌を高く掲げる彫刻がそびえていた。

人々は二つの建物の間を行き交っていた。立ち止まって写真を撮る者もいれば、そのまま通り過ぎていく者もいた。

道子は歩みを緩めた。

その朝、彼女が指揮したのは、千年も昔に生きた人々が詠んだ、鳥や波についての歌だった。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

まだ完全には日が暮れていない。

そして今、彼女は鷲と鎌槌の間に立っていた。

周囲の話し声が次第に途切れていった。

もう、誰も笑ってはいなかった。

近くにいた誰かが、小さな声で言った。

「これが私たちの現代世界だとしたら、私たちにどんな未来があるのだろう？」

誰も答えなかった。

その夜、道子は、一日を二つに引き裂かれたような思いを抱えて家路についた。

コメディ・デ・シャンゼリゼで浴びた拍手は、まだ耳の奥に響いていた。

そして同時に、トロカデロで互いに向かい合ってそびえていた、あの二つの巨大なパビリオンの姿も脳裏から離れなかった。

何年経っても、彼女の記憶に残っていたのは音楽だけではなかった。

夏至の日の、いつまでも沈まない太陽の光だった。

パリは輝いていた。

輝いていた——そして、ガラスのように脆かった。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

外山道子について — 著者ノート

（1912年9月1日 - 2006年3月31日）

30年前、私は祖母・外山道子との間のテーブルに、録音機を置くようになった。

1937年の夏、パリで自信に満ちて指揮棒を振り上げた若き作曲家は、その頃にはすでに老境を迎えていた。私の質問に根気よく答えるその姿を見ていると、同じことをこれまで何度も尋ねられてきたのか、それとも、誰かが尋ねてくれるのをずっと待っていたのか、そのどちらかのように思えた。

家族にとって、彼女はただの「おばあちゃん」だった。受賞歴を持つ作曲家としての彼女は、私自身が探しに行かなければ見えてこなかった。そして私がそこで見つけたもの——あのパリの夏から先、何年、何十年という歳月の中で彼女に何が起きたのか。その驚くべき物語を、この連載で綴っていく。

それは、平坦でも容易でもない道のりだった。立ちはだかる壁は高かった。第二次世界大戦は、ほかのすべての人々と同じように、彼女の人生にも大きな影を落とした。その後、創造的で独創的、そして時代をはるかに先取りしていた彼女の音楽の多くは、日本で何十年もの間、演奏されることがなかった。

戦後、長い歳月を経て再び音楽の世界で活動を始めたとき、彼女が戻ったのはコンサートホールではなかった。彼女は「音」そのものを追い求めた。パリでピエール・シェフェールが切り拓いたミュージック・コンクレートから、ニューヨークのコロンビア大学にあった電子音楽スタジオへ。そして日本に帰国した後には、世界でも数少ない尺八の音響研究者の一人となった。

今日なら、彼女が歩んでいた道を表す言葉がある。科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、数学（Mathematics）の頭文字を取った「STEM」は、今では広く知られている。そこに芸術（Arts）を加えれば「STEAM」となる。しかし、この言葉が生まれたのは、道子の人生も終わりに近づいた頃だった。彼女は、まだ名前さえ存在しなかった分野の先駆者だったのである。

私は、いつか彼女の人生と仕事について本を書きたいと思い、録音テープや撮影した映像を大切に保管してきた。2006年に彼女が亡くなった後も、楽譜、学術論文、そして数え切れないほどの箱に収められた私的な書類や資料など、彼女が遺したものをすべて保存してきた。

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.

長い間、それらは、長く豊かに生きた一人の女性の人生から残された、ばらばらの断片にすぎなかった。当時の私には、それらをひとつにつなぎ合わせるための背景も文脈も、まだ十分には見えていなかった。

この3年間、私はパリ、バーゼル、ニューヨーク、東京、大阪を訪ねた。かつて彼女が立った場所に自分も立ち、資料を探し、人々に話を聞きながら、彼女が生きた世界を理解しようとしてきた。

そうして初めて、ばらばらだった断片が少しずつつながり始めた。

この旅から生まれたのが、このクリエイティブ・ノンフィクション作品である。

物語は、道子が曽孫のリンに宛てて遺す「最後の手紙」という形で進んでいく。そして物語全体を貫いているのは、道子という人間を形づくった家族の存在である。なかでも大きな存在だったのが、「タイガー」の愛称で知られた祖父・修造だった。明治という時代を生きた彼の強いビジョン、ひたむきさ、そして勤勉さを、道子は受け継ぎ、修造自身が想像もしなかったほど遠くまで運んでいった。

30年もの間、私の心を捉えて離さなかったのは、彼女の人生の中でも、誰の目にも触れなかった部分だった。

日本と西洋の間を生きたこと。そして、一人の女性として自らの道を選び、ほとんど誰にも、自分が何を求め、何を成し遂げようとしているのか理解されない厳しい時代の中でも、前へ進み続けたこと。

それこそが、彼女が打ち破らなければならなかった「見えない壁」だった。

今も、同じような見えない壁の前に立ち、苦闘している人はたくさんいる。

けれど、一人がそこを通り抜ける道を見つければ、そのあとを歩く人たちにも、少しずつ道が見え始める。

だから私は、この物語を『The Waymaker』と名づけた。

英語原文（The Mainichi）

https://mainichi.jp/english/waymaker/

外山道子のウェブサイト

https://michikotoyama.org

© 2026 Maki Saito. All rights reserved.